

マレーシアにおける CBR の課題と活動事例の分析  
ー 障害児・者を囲む関係変容の「場」としての可能性

原田 真帆

## 1. 研究の目的と方法

筆者は 1998 年から 2001 年、そして 2003 年から現在に至るまで、青年海外協力隊（以下、協力隊と称す）としてマレーシアで活動している。活動内容は、マレーシア社会福祉局が手がける「Community Based Rehabilitation (CBR、地域に根ざしたリハビリテーション)」プログラムへの協力である。

CBR においては、障害関連の取り組みが「地域開発の戦略」として位置づけられている。これは、障害分野の発展が地域の発展につながる、という理念を意味し、障害問題を個人の問題ではなく地域の問題として捉える立場にたつ。つまり、CBR を通じて障害分野に取り組む時には、従来行われてきた「医療・個別モデル」ではなく、「社会モデル」による捉え方が重視される。医療・個別モデルは、「問題は障害者個人にある」という考えが基になり、一方、社会モデルは「問題は社会にある」という考えが基になっている。ここに、これまで少数者の問題として後回しにされがちな障害問題が、全ての人の問題として、全ての人に取り組むべき課題となる可能性を見ることができる。

しかし、筆者が関わっているマレーシアの CBR プログラムの多くは、障害者に訓練を施し、彼らが「(機能的に)よくなる、変わる」ことで社会参加を達成させることを目指している。そのため、障害者個人に対する医療・教育リハビリテーションに重点が置かれ、障害問題が地域の問題として捉えられにくく、結果として CBR 活動が CBR センターの活動に限定されて、そこに地域住民を巻き込むことが困難な状況となっている。そして、障害者はいつまで経ってもサービスを提供してもらわされる立場であり、本来 CBR が目指していた本当の意味での障害者の社会参加には程遠い状態である。

以上のように、「CBR 本来の概念」に照らしてマレーシアの CBR を分析するとそのギャップは大きく、これについての論考も少なくない。しかし一方で、筆者が現場で接してきた CBR 活動の実例一つ一つを見てみると、CBR に関わる人々の関係が変容した結果、積極的効果を生み出した実例がいくつか存在する。例えば、障害児個人へのサービスの提供という活動がきっかけとなり、多くの人々が関わり、様々な要因が重なり合った結果、「周囲の者たちが変わった」という実例がある。

そこでこの研究の目的は、理念的に批判されることの多いマレーシア CBR の実態について、筆者が身近に知るいくつかの実例を分析する作業を通して、再検討し、その問題点とともにマレーシア独自の積極的側面を明らかにし、マレーシア CBR の今後の方向性

を提示する際の枠組みを考えることである。

研究方法であるが、マレーシアの国の概要、関係省庁の政策や障害者サービスの概要、CBR の概要や諸問題に関しては、各種文献、政府刊行物や資料、Web サイト等を参考にしている。更に、筆者が行政担当者や CBR ワーカー、協力隊等関係者等の関係者との直接のやり取りや、会議、講習会等の場で見聞きしたことも参考にしている。

また、本論文で取り上げている事例に関しては、筆者が CBR 活動に関わった実体験やその中での関係者との会話、CBR ワーカーを務める障害者自身へのライフヒストリー調査、関係者への聞き取り調査を基に記述している。また、参考資料として、筆者自身の個人記録、CBR ワーカーが作成した手記（障害児のライフストーリー）、ワーカーや協力隊員が作成した報告書や写真、ビデオ等を参考にしている。

## 2. 論文の構成

第1章 序論 .....	1
第1節 研究の背景	1
第2節 研究の目的	2
第3節 先行研究について	2
第4節 研究方法	3
第5節 論文の構成	4
第2章 CBR の概要 .....	5
第1節 CBR の概念	5
第2節 CBR の動向	7
第3章 マレーシア CBR の背景と概要 .....	8
第1節 マレーシア社会の背景	8
第2節 マレーシア障害者関連政策・サービスの歴史的展開	11
第3節 マレーシア CBR の概要	16
第4章 マレーシア CBR の諸問題 .....	20
第1節 マレーシア CBR に対する諸見解	20
第2節 マレーシア CBR の実態	22
第3節 実例に見るマレーシア CBR の限界	31
第4節 まとめ	34
第5章 マレーシア CBR の可能性 .....	35
第1節 CBR 活動の積極的側面を示す諸実例	35
第2節 CBR と自立生活運動	56
第3節 まとめ	60
第6章 マレーシア CBR の展望 .....	63
第1節 社会福祉局の今後の計画	63
第2節 マレーシア CBR の今後の方向性	64
あとがき .....	66
引用・参考文献 .....	67

### 3. 論文の概要

第1章では、本研究に取り組むことになった動機、背景について述べ、更に研究目的や、選考研究、研究方法について記述している。

1970年代後半からWHO等の国際機関にて世界各地で紹介、導入された「Community Based Rehabilitation (CBR、地域に根ざしたリハビリテーション)」においては、障害関連の取り組みが「地域開発の戦略」として位置づけられている。これは、障害分野の発展が地域の発展につながる、という理念を意味し、障害問題を個人の問題ではなく地域の問題として捉える立場にたつ。

筆者が1998年から青年海外協力隊として関わっているマレーシアでも、政府の政策としてCBRプログラムが掲げられ、全国展開している。しかしマレーシアのCBRプログラムの多くは、障害者に訓練を施し、彼らが「(機能的に)よくなる、変わる」ことで社会参加を達成させることを目指している。それは、障害は個人の問題であり、その個人の問題が解決しない限り、障害者の社会参加は達成し難いとみなされていることを意味する。そのため、障害問題が地域の問題として捉えられにくく、結果としてCBR活動がCBRセンターの活動に限定されて、そこに地域住民を巻き込むことが困難な状況となっている。

このように、「CBR本来の概念」に照らしてマレーシアのCBRを分析するとそのギャップは大きく、これについての論考も少なくない。例えば、マレーシアのCBRが「知的障害児を対象とする小規模施設での狭義の意味でのリハビリテーションサービスの提供」という偏ったかたちで推し進められており、対象者の限定や活動の制限、地域住民の実施への参加の不足、特に当事者としての障害者の参加が不足していることを問題として提示している先行研究や、マレーシアのCBRは「政府主導(トップダウン)のアウトリーチ型のリハビリテーションに属している」と分析している先行研究がある。

しかし一方で、筆者が現場で接してきたCBR活動の実例を一つ一つ見てみると、CBRに関わる人々の関係が変容した結果、積極的効果を生み出した実例がいくつか存在する。そこでこの研究の目的は、理念的に批判されることの多いマレーシアCBRの実態について、筆者が身近に知るいくつかの実例を分析する作業を通して、再検討し、その問題点とともにマレーシア独自の積極的側面を明らかにし、マレーシアCBRの今後の方向性を提示する際の枠組みを考えることである。

第2章では、本研究題材であるCBRに関する一般的事情を確認するために、CBRの概念形成や、CBRに関する論評についてグローバルな視野で整理する。また第3章では、地域社会を基盤に実施されるCBRを分析することをふまえ、社会の在り様について確認するために、本研究のフィールドであるマレーシア国の歴史や文化概要について述べる。続いて同章で、マレーシアで実施されているCBRの概要および歴史的展開、マレーシアの障害者関連政策・サービスについて概観する。以上第2章、第3章が、論文導入部を

なす。

第4章では、マレーシアのCBRについて何が問題として批判され、本来のCBR概念に照らして何が限界とされてきたかを、諸問題の要因についての考察とともに、分析する。

マレーシアのCBRが本来の概念とかけ離れてしまった背景には、CBRの推進方法に依るところが大きい。政府の政策として実施したことで全国展開が可能となり、継続した活動を可能とした。しかし、地域における障害児サービスの実現を量的に普及することに重点が置かれ、一斉的、画一的にCBRが展開された。さらに、「障害者はマイナスな問題を抱える哀れな存在である」という一般の人々や専門家の障害者に対する消極的・否定的態度も相まって、地域住民やCBRワーカーがCBRの概念や意義を十分に理解しないまま活動が実施されてきた。

そして一方、第5章では、これら限界にもかかわらず、現場で萌芽的に観察される独自の積極的効果を、複数のCBR活動の実例の分析を通じて明らかにする。

例えば、身体障害をもつ我が子を社会に出すことをためらっていた両親が、CBRセンターを利用することを通して、我が子の社会参加の可能性を信じるようになり、さらにCBRワーカーや学校関係者と協力し、校舎をアクセス可能な建物にすることで同身体障害児の公立小学校入学を可能とした。そして、同学校はその後にも障害児を受け入れる方針を打ち出したという実例がある。同実例を通し、障害者が家庭から出て、社会に関わるきっかけづくりとして、CBRセンターが「社会参加をするための最初の準備段階の場」としての役割を担うことを考察した。

また、地域資源を活用しながら障害者が主体的に生産的活動を展開する実例では、CBRセンターが「仲間と交流する場」となり、さらに障害者が仲間と共に生産活動を行うことで、地域住民と相互扶助の関係を築くことが可能になると分析した。

別の実例では、CBRセンターが「所属の場」としての役割を担い、障害者が「所属の場に行く、所属の場で活動を行う」という日々の目的をもつことを可能としていることがわかった。これは、寝たきりで全介助状態の女性が、毎日定時に両親を促しセンターに通所している実例から考察している。同実例の考察を通して、筆者は「寝たきりの可哀想な障害者」という否定的メッセージを払拭し、「与えられた状況の中で、日々の目的を生み出すたくましい女性」という肯定的イメージをもつことになった。

また、CBRワーカーとして活躍する障害者のライフストーリーを通して、障害者と、筆者を含む障害者を取り巻く人々が交流していく中で、双方の関係性が変容していき、障害者自身がエンパワメントしていく姿をみることができた。

最後に第6章では、上述の限界と積極的経験とをマレーシアCBRの発展過程の中に位置づけ、今後の方向性を提示する。

第5章にてCBR活動の実例を一つ一つ分析した結果、CBRセンターが様々な機能を果

たしている実態がわかった。これは、CBRセンターが、障害者を取り巻く人々が「知り合い、関係を築いていく場」として機能し、さらに「その関係性をも変容させていく場」になり、周囲を変えていく可能性をもっていることを示していると言える。

CBRが達成すべき変化は、単に障害者同士や彼らを取り巻く人々が場を共有するだけで起きるものではない。また、どちらかが一方的に働き掛けるだけで起きるものでもない。CBRプログラムが媒介となり集まった人々が、向き合い、障害問題を共有し共に取り組むことで、はじめて変化が可能となる。その時に意識すべきことは、主体的に考え行動する機会が乏しく、受動的立場にならざるを得なかった障害者が、共に障害問題に取り組む仲間となることを可能にするには、非障害者が集まる環境の中に「障害者も参加可能です」と伝えるだけでは不十分であることである。障害者が参加の意思を持ち、発言可能となるような環境を皆でつくり上げることが必須である。

そのためには、ワーカーや家族らを中心とする周囲の者が、障害者が自身の気持ちを表現したり、意思や要望等を伝えることができるような環境を整えていく必要がある。例えば、仲間との出会いの場、仲間と過ごす喜びを分かち合う場、仲間と共に問題解決に取り組む場を設定し、それらの場を通して、自身の思いを表現する力が備わるように支援していくことが必要である。そのような環境をつくり上げることは、一人のワーカーや家族のみでは難しく、障害者を取り巻く地域の人々の理解、協力が求められる。

CBRにおいて、地域住民を巻き込んだ「障害者が主体的に行動できるような環境づくり」は、その活動に関わった人々（障害者および非障害者）の集団としての力を養い、地域全体を改善していく力へと発展していく可能性を秘めている。そこに、地域住民を巻き込む方向への今後のCBRの展望がある。